

島田正治

この九月でメキシコ在住、二十一年めに入った。七十四歳である。住みはじめた当時、村には誰ひとり知る人もなかった。左も右もまるでわからない。自炊を始めたので、食料品を買いに行かねばならない。思い切って家の外に出た。この男は何者だろうと道で会う村の人からきっと怪訝な眼で見られたにちがいない。

近況を伝えるべく、日本の留守家族に手紙を書き、何日かして郵便局へ手紙を出しに行った。村のプラサ（広場）で若者に「郵便局はどこにありますか」と聞いてみると「小学校校門のむこう電柱三本あたりのところ、あの黒い扉のある家がそうです」と親切に教えてくれた。

行ってみると、黒い扉はあったがここが郵便局ですという何の印もない。しばし扉の前に立っていると、その扉の取手のあたりに、切手のはり残しのようなものが白くあるのに気がついた。多分ここにまちがいはないだろうと確信を持った。

朝九時、開館らしい。ドア が開いて中から中年の女性が顔を出した。ここで働いているホセフィーナ、愛称チェパさんで年齢は四十歳ちょっと越えている感じであった。愛想よく迎えてくれて握手した。

「こんどここに住むようになった日本人の島田です。画家です。」と自己紹介「よくいらっしやいました。こちらこそどうぞよろしく」と言われ、さし出された紙片に名前と住所を書いた。

あたりを見渡すと、郵便局といっても何も無い。ガラスのケース一基、あとは名前の区割りの棚がひとつ部屋の半分はカーテンで仕切られていて物置になっている。

あとでわかったことだが、ここは郵便局などという大げさなものでなく、郵便の中継所というていどのものであった。毎朝、チャパラから定期バスが運行していて、郵便物の袋を届ける。この時刻になると大勢の村びとたちがあちこちから集まってきて、この郵便袋の開くのを待つのがだった。二十年前となると、今のように銀行の送金など容易でなく、現金書留、小切手などが多くあった。アメリカへの出稼ぎの息子や娘からの送金を待ちわびる。

その郵便を扱って何十年にもなるチェパさんがこの仕事をやめるといいだしてまもなく局は閉じられた。聞くところによると給料も安く、無報酬に近かったという。このあとは、村長のエベラルド氏が代行、これは二年ぐらい続いたが途中で止めてしまう。以後、ルーペさん、ジェシカさんをつづいて、目下、この中継所は閉じたままになっている。すでに三週間になるのにサンアントニオ村あての郵便物は一体どうなっているのだろう。受け手の中継地がないので、きっとチャパラ局がまた隣町のアヒヒにそのまま開封もされず置き放しになっているのにちがいない。

手紙好きのわたしは一番にその打撃をうけている一人だが、手紙が来ないさびしさといったらない。手紙がくると、必ず返事をすぐに書いて出した。遠いメキシコにひとり住んで、この手紙こそが自分を支えてくれる柱になってくれていることは本当と思う。年々歳々人同じからず、人の気持ちにもいろいろある。それでいいのだろう。これが人間の生きている証しでもある。（つづく）

ご意見・ご感想はアルテ・シマダまでお送りください。